

千葉大学 柏の葉カレッジリンク・プログラム

大学の知的資産が、市民のライフスタイル充実や地域活性に生きる



柏の葉キャンパスシティには、その街名を象徴するように地域全体を学びのフィールドとする、千葉大学主催の社会人学習プログラムがあります。環境、健康、食といった身近なテーマの下に、大学の研究者と市民が集まり、より良い地域環境やライフスタイルを探ります。農作業体験や新たな空間計画の構想などを通じて、共に学びあう関係が強まり、血縁や地縁ならぬ「知縁」という新たなコミュニティ形成にもつながっています。

考え、選択し、生活の質を高める

「野菜作りは子育てと同じです。子育てを手抜きして、病気になる前から大量の薬を子どもに飲ませる親は良くないですね。でも、病気になっても薬を一切飲ませないとなると、それも問題です」

これは、千葉大学環境健康フィールド科学センターで行われている柏の葉カレッジリンク・プログラムのひとコマ。プログラムは概論コースや専門コースなど3つのクラス編成。会社員や主婦、学生など、幅広い年齢層の約30人が受講し、「健康と予防医学」「食と農」といった暮らしに関わる問題を題材に、ワークショップ形式で講師と共に考え、仮説を立て、地域活動を通して検証する、従来にはない学習スタイルとなっています。

たとえば「食と農」について考える際、化学農薬のリスクとメリットを理解したうえで、食の安全性や生産コスト、食料自給率、食文化、生産や流通過程でのCO₂排出量など、複雑に絡み合う諸課題をどのように考えるのか、議論が進みます。講師の専門的なアドバイスを受けながら、

「化学農薬は悪」という一般的な先入観から視野を広げ、リスクとメリットをうまく生活の中に取り入れて暮らしの質を高める、という発想転換が生まれます。

学んだことは即、実践

講義の後にはすぐ実習。先ほどの「食と農」をテーマとした回でも、受講生は農場で野菜を収穫し、料理して食べる、といった生産・加工・消費のプロセスを専門家と一緒に体験します。

「美味しく安全なものを安価で」という消費者の一方的な立場でしか見ていなかった野菜に対しても、自分で土に触れ、苦労して育ててみることで、新しい視点が生まれます。受講生の徳永忠之さんは、「自分たちが食べているものが、どういうプロセスを経てできているのかがよく分かった。気軽に消費している農産物が、いかに価値があるのかを実感した」と話すように、食卓から地域の農業や環境を考えるきっかけとなっているようです。

安全で美味しい食環境を持続させていくためには、消費者として安さや規格

だけにこだわるのではなく、地域の農産物を適正価格で購入し、生産者を支えていく、ということも必要なのですね。



スモモの収穫体験。長時間見上げる姿勢が続くと、首や腰が痛みだし、農作業が想像以上に重労働であることが実感できる。



自分たちで採ってきたばかりの野菜を早速調理。普段料理をしないので戸惑っている男性に対しては、「キッチンに立つと、食や環境を考えるきっかけになるばかりか、家庭円満にもつながる」と講師からのアドバイスも。

千葉大学 柏の葉カレッジリンク・プログラム

受講生が地域に羽ばたく

カレッジリンク・プログラムで学んだことを暮らしの中で実践し、生活の質を高める人が増えることは、地域全体の環境改善、活性化につながっていきます。さらに受講生の中からは、街づくりに関わる事業やプロジェクトに自主的に参加し、地域で活躍する動きが広がっています。

柏の葉アーバンデザインセンター (UDCK) で行われている「まちづくりスクール」のサポートスタッフとして協力する人、まちのクラブ活動を新たに立ち上げる人、地域環境を考えるイベントの企画・運営に携わる人。



柏市長が校長を務める「まちづくりスクール」では、カレッジリンク受講生の3人が企画・運営のサポーター&ファシリテーターとして活躍している。

中には、耕作放棄された地域の農地を新たに耕し、市民のための体験農園を誕生させようと奮闘する動きも。農業体験を通じて自然や食を大切にする暮らしを学び、地域の魅力を再発見する市民を増やしたい、という目的の下に受講生の有志が集まり、野菜作りに挑んでいます。

新規ビジネス誕生の可能性も

「仕事だけの交友関係だと視野が狭くなる。このプログラムに参加することで、仕事にはない出会いが生まれ、考え方の幅が広がった」と参加者の高橋浩之さんが語るように、年齢もバックグラウンドも



市民のための体験農園づくりが始まっている。カレッジリンク受講生でもある柏たなか農園の松本庸史代表に指導を仰ぎ、荒地の草刈からはじまった耕作も、現在は順調に野菜が育っている。

異なる人たちとの交流は、日常生活にはない貴重な機会。

「農業に関する新規ビジネスを検討している。ここで身に付けた知識や人間関係を生かしていければ」という参加者もいるように、このプログラムから新たなマイクロビジネスが立ち上がる可能性も。

現在専門コースの前期課程では、千葉大学環境健康フィールド科学センターの敷地内で市民体験型の実証実験スペースを新たに創り上げる構想案を、受講生が検討中。今秋から始まる後期課程では、漢方などの東洋医学を柱としたプログラムを展開する予定とのことです。

9月には、前期課程で検討された構想案の公开发表と、後期課程のプログラム説明会が開催されます。この機会に、カレッジリンク・プログラムの雰囲気を経験してみたい。

問い合わせは、千葉大学 柏の葉カレッジリンク・プログラム運営事務局 (柏の葉アーバンデザインセンター内) [TEL] 04-7140-9686 [E-MAIL] c-link@udck.jp

キーパーソン・トーク

カレッジリンク・プログラムは、大学が中心となって地域と連携し、市民と共に学びあい成長していくことが最大の特徴となっています。大学の知的資産を地域に開放し、市民と研究者が交流することで知的・文化的な刺激が生まれ、生活の質を高めていくことに繋がります。

市民が地域に関心を持ち、主体的にアイデアを出しながら動いていくことで、新たな交流や活動が生まれ、街が活性化し魅力あるコミュニティが形成されていくのです。また、大学側としても、従来の専門領域に閉じた研究体制の壁を壊し、リアルな生活現場のアイデアを市民交流によって吸い上げ研究に反映させる「市民科学」を確立したいと考えて

います。

このような活動は持続性が大切です。一般的な市民活動は、特定の問題解決に向けた取り組みであり、その目的が達成した時点で活動の役割は終了します。一方このカレッジリンク・プログラムは、「市民生活の質の向上」という永遠の目的に向けて、食と農、環境とまちづくり、健康と予防医学、スポーツコミュニティなど、複合的な課題を考えていきます。

ここでの学習経験を、家庭の暮らしの中で生かしていく人もいれば、マイクロビジネスを立ち上げたり、大学院に入って研究テーマを追求したりと、受講生のそれぞれの立場や目的にあわせて活動の幅を広げてほしいです。



上野 武
千葉大学教授
建築設計が専門で、千葉大学キャンパス整備企画室長として、キャンパス計画や環境マネジメントにも取り組んでいる。柏の葉で千葉大学のサステナブルキャンパスの実現を目指し、地域との連携共創の仕組みとしての柏の葉カレッジリンク・プログラム開発に参加。

□編集後記□

今回、取材のために私もカレッジリンクに参加しましたが、収穫時期や土の状態で味も姿も日々変化する野菜を見ると、「野菜も生き物である」という当たり前のことが実感できました。野菜の命を大切にする想いが、食の安全性や「もったいない」精神を培っていくのでしょうか。(小林)

*「カレッジリンク」は村田アソシエイツ(株)の登録商標です。

●このニュースレターに関するお問い合わせ先

柏の葉アーバンデザインセンター (UDCK) 広報担当 小林、蛭川
〒277-8518 千葉県柏市若柴字元堂178-3 柏の葉キャンパス駅前148街区3画地
TEL 04-7140-9686 FAX 04-7140-9688
E-MAIL ma-kobayashi@udck.jp WEB http://www.udck.jp

柏の葉
アーバン
デザイン
センター

UDCK